

保育者としての総合的な学びに関する研究

—修養会における学生の主体的活動のあり方—

山 森 泉
中 島 賢 介

はじめに

キリスト教主義の本学の保育学科では、保育者としての人間形成に深く関わる行事として、学科創設時から今日まで55回を数える「修養会」行事を毎年行ってきた。(表1参照)初代の学生によって、「講演や聖書研究を中心に深く考え又語り、交わり、み言葉に聞く」プログラムが始められたのである。(註1)

主題テーマを振り返ってみると、大きく3つの時期に分類できる。第1回から第12回ごろまでは信仰的学びの面が強く出ており、学生規模は1学年30名前後と現在の4分の1程度であった。第45回ころまでの第2期は、1学年100人超と学生数が急増した時期であり、女性としての生き方や人生とはどうあるべきかを主題として掲げていた。

いくつかの変遷を経て、現在は第3期と位置づけられる。時代と共に学生の質や関心事に変化が現れ、修養会に関してもいくつかの問題点が生じてきた。従来の教員主導の修養会では、学生の積極的な姿勢は生まれませんが、学生主体だけで進めていくには宗教面での取り組み等に限界がある。修養会の目的として、「1. 聖書の言葉やディスカッションを通してこれまでの生き方を振り返り、心豊かな保育者として歩むために、これからの生き方を考える。2. キャンパスを離れて寝食を共にする中で、友人や他学年との交流を深め、牧師・教職員との親睦のひとときを持つ」の2点を掲げている。11月中旬から下旬にかけて行っている現在の修養会は、聖書を通じた人間観の学びだけを目的としていない。時期的に捉えれば、保育者養成校で学んだ2年間の総合という位置づけになる。そこで、以前は聖書の学びの色彩が濃かった修養会を、キリスト教理解や保育者としてのあり方を再確認する「総合的な学びの場」として新たな視点から捉え直し、変更を試みてきた。本稿では、部分的に学生主体のプログラムを取り入れることで、より主体的な参加と学ぶ姿勢を得られる方策について、ここ数年の試行錯誤をまとめ、考察を加えた。

表1 修養会テーマ・主題講演講師一覧

(※に関しては註1参照)

回	年	月日	テーマ	講師
1	1951	9月6～8日	真理は汝らに自由をえさすべし	菊田 澄江
2	1952	9月10～12日	人もしキリストにあらば、新たに造られたる者なり	宮本信之助
3	1953	9月10～12日	キリストとの邂逅	久山 康

山森 泉・中島 賢介

4	1954	9月9～11日	われら誰にゆかん	熊野 義孝
5	1955	9月7～9日	家庭、職業と信仰、交わり、キリストとは誰か	山本 武雄
6	1956	9月6～8日	今私は人に喜ばれようとしているのか、それとも神に喜ばれようとしているのか	高田 英治
7	1957	9月9～11日	キリスト教の信仰について	松本治三郎
8	1958	10月7～9日	科学と宗教、永遠の生命、人間とキリスト	P. L. パルモア
9	1959	9月10～12日	私たちの使命—み心に生きる生活—	加藤 常昭
10	1960	9月8～10日	この人は誰か	松本 芳夫
11	1961	9月11～13日		森野善右エ門
12	1962	9月11～13日	交わり	斉藤 昭夫
13	1963	9月9～11日		加藤 常昭
14	1964	9月9～11日		P. L. パルモア
15	1965	9月22～24日		宗藤 尚三
16	1966	9月12～14日	価値ある人生	山田 基男
17	1957	9月11～13日	生き甲斐について	亀谷 凌雲
18	1968	9月9～11日	人間の罪と髪のア	太田 俊雄
19	1969	10月12～14日		高木 幹太
20	1970	9月6～8日	価値ある人生	富田 光一
21	1971	9月16～18日	愛	大久 保照
22	1972	10月9～11日	生きがい	西村 次郎
23	1973	10月2～4日	愛	山崎 亨
24	1974	9月30～10月1日	生きる	久山 康
25	1975	10月23～25日	生きるよろこび	大宮 溥
26	1976	10月21～23日	青年と信仰	森田 弘道
27	1977	10月27～29日	聖書の中の女性たち	井上 良彦
28	1978	10月5～7日	人間にとって一番大切なもの	中森幾之進
29	1979	11月12～14日	聖書は現代人に何を語るか	檜本 信篤
30	1980	10月13～15日	私たちの使命	大宮 溥
31	1981	10月15～17日	生きるよろこび	加藤 常昭
32	1982	10月11～13日	見えるもの見えないもの	四竈 揚
33	1983	10月17～19日	自由への選択	大串 元亮
34	1984	10月11～13日	受ける愛与える愛	加藤 久雄
35	1985	10月17～19日	共に生きる	永井 修
36	1986※	9月29～10月1日	私たちの使命	吉田 満穂
37	1987※	10月19～21日	私たちにとって一番大切なもの—愛に生きる—	大宮 溥
38	1988	9月29～10月1日	求める人生—保育者としての生き方—	四竈 揚
39	1989	9月20・21日	生きる喜び—女性としての生き方をめぐって	東方 敬信

保育者としての総合的な学びに関する研究

40	1990	9月27・28日	私たちのにとって大切なもの	阿部 祐治
41	1991	10月31～11月1日	受ける愛与える愛	大橋女久美
42	1992	10月29・30日	隣人を愛する人生	バー吉ニア・ ディーター
43	1993	10月28・29日	やさしさとは	平野 克己
44	1994	10月27・28日	愛と結婚	茂 純子
45	1995	10月26・27日	悲劇のヒロインになったとき―立ち直るために―	矢野 一郎
46	1996※	10月(28・29日)	「キャンドルサービス」のプログラムのみ残っている	
47	1997	11月6・7日	愛の関係を生きる	上垣 信子
48	1998	11月5・6日	私の価値―何のために生活し、生きているのか―	工藤 信夫
49	1999	11月4・5日	こころ豊かに生きるために―保育者として―	平野 克己
50	2000	10月23・24日	こころ豊かに生きるために―保育者として―	山口 博
51	2001	11月20～22日	かけがえのない大切な存在	畑野 純一
52	2002	11月20～22日	互いに愛し合おう	佐藤 誠司
53	2003	11月19～21日	子どもを通して自分自身を考える	阿部 祐治
54	2004	11月17～19日	神があなたを造られた目的	堀岡 啓信
55	2005	11月16～18日	あなたの使命は何ですか―選択の時―	小宮山 剛

1. 保育者の総合的学びとは

乳幼児の発達には様々な側面が絡み合っているため、保育者は子どもたちの育ちを総合的に捉えていく必要がある。だが、「総合的学習の時間」の考え方が十分に浸透していない中等教育で育ってきた学生にとって、「総合」という概念を理解するのは容易ではない。そのため、概念理解の前に、教科科目を有機的に結合させた上で体系的に学ぶという「総合的な学び」の体験を学生たちがしておく必要がある。

総合学習のねらいの一つでもある「地球環境問題」を例に挙げてみよう。従来の学問分野のカテゴリーでは論じきれないこのテーマは、現在では自然科学からも人文科学からも、そして社会科学からもアプローチが可能な複合領域として位置づけられている。さらに、研究を展開していく上で、それぞれの分野同士の連携が不可欠である。総合演習が「人類共通のテーマ」を取り上げる理由はそこにある。一方向からのアプローチのみで解決できる問題ではないからだ。

この構造は、五領域と子ども一人ひとりの育ちとの関係にほぼ一致している。子ども理解に関わるアプローチとして五つの領域があるが、それらは明確に区別されているわけではなく、それぞれのアプローチを展開させていくうちに自然と互いの領域が影響し合う。保育現場において保育者は体験的にその相互影響関係を学んでいく。しかし、この影響関係を把握していない学生には、異なる科目で同様な事柄が取り上げられている理由を理解するのは困難であると思われる。

「総合演習」と「総合的学び」の違いを見ていくと、「総合演習」の優れた点は、人類固有の問題を取り上げることで、社会の一員として生きていく上で必要な知識を獲得することにある。だが、教育現場において「総合」の考え方が浸透しているかどうかを鑑みると、依然として「総合とい

う名の特殊」、すなわち専門家が自らの専門性においてのみ指導しているのが現状である。その点、「総合的学び」は、「総合という考え方」そのものを学ばせることに主眼が置かれている。保育の専門科目においては、「保育方法論」、「保育課程総論」がそれに相当する。しかしそれだけでは、あくまでも専門科目内における総合化であり、「総合」そのものの概念を直接説明したことにはならない。ゆえに、直接説明するための学習のねらいを新たに考える必要がある。

そこで考案したのが、「総合演習」という授業形態に抛らず、授業そのもので「総合的な学び」の体験させるという試みである。

2 問題点とプログラムの見直し

第1回から第38回(1988年)まで2泊3日で行われてきた修養会は、授業時間数の増加などによる学生への配慮により第39回から1泊2日に変更された。しかし、このようなプログラムでは講演を聞いて考えることだけで精一杯で、普段の学びを総合化していく時間的なゆとりは取ることができない。このため、第51回(2001年)から再び2泊3日のプログラムに戻すことになった。1泊2日の日程では時間的に制約されていた学生による企画も復活し、学生が主体的に参加する場を多く取り入れるように配慮した。また、そうすることで主題から逸れないように、自分たちで方向付けをしながら行動することができるようになった。

しかし、一方では問題も生じた。学科会議などで指摘された学生側に関する問題点をまとめると以下の5点が挙げられる。

- ① 宿泊日数増加に伴い欠席者が増加した。(欠席理由は必ずしも体調不良だけではない。)
- ② 宿泊訓練が不十分な学生や問題意識が欠如した学生による体調管理の甘さがあった。
- ③ 修養会に対する目的意識が希薄な学生が増加した。
- ④ 修養会委員のなり手がいないなど、団結力の低下が見られた。
- ⑤ ディスカッションを行う分団の一員であるという意識が低い学生が見られた。

他方、主題講演を依頼する講師に関しても検討を要した。学生の関心事や実情実態を把握していない講師による講演内容と学生の意識との隔たりが大きくなると、修養会そのものに影響が及びかねないからである。こうした問題点を抽出しながら、学生の行事への参加意欲を向上させ、いかに効果的に学ばせるかについての検討が担当教員間でなされ、次の3点において事前事後指導を含めたプログラムにするように改善を図った。

- ア. 学生に身近な牧師(例えば、本学での授業経験がある牧師や附属幼稚園を持つ近隣の教会の牧師)に主題講演を依頼することによって、学生の関心に即した講演内容とする。
- イ. 修養会期間中だけのプログラムとせず、事前事後の学びも重視し、この流れに沿った指導を確立する。
- ウ. 学生の学びや行事参加における主体性を尊重し、満足度を高めるフォローアップができるシステムを確立する。

上記の点を踏まえ、具体的な対応策を以下のようにした。

- ① 分団を構成する人数の幅を許容する。また、分団単位と個人単位でのプログラムの二本立てにする。

- ② プログラム内容を見直し時間的ゆとりを確保する。オリエンテーション時の注意を具体的にを行う。
- ③ 主題について予め考え、問題意識を持って修養会に臨むように、事前作文を課す。
- ④ 核になる学生へ働きかけ、修養会委員の構成に配慮する。委員の存在を自他ともにアピールし、委員に対する認識を深める。
- ⑤ 分団メンバーの決定を前期中に行い、人間関係の把握に努める。事前に分団の1・2年生の顔合わせの機会を作る。また、分団リーダーに対する講習会を実施する。

詳細については、次章以下で述べる。

3 各活動と保育者養成とのつながり

(1) 分団での2年生の働き

修養会においては1・2年生約250人を分団に分け、そこに助言講師として牧師または教員が加わる。一分団の人数は、話がしやすく発言する機会を保障するために、十数名までである。1・2年生合同で行う分団のディスカッションにおいて、自己紹介から始めては、限られた時間内で話が深まらない。そこで、修養会参加前に顔と名前が一致し、ある程度話せる雰囲気を作るため、1～2回程度の顔合わせの機会を設定した。その際、簡単な報告書提出を義務付けた。提出時には直接リーダーに感想を聞いたり、書かれた感想に目を通したりして、リーダーが困っている事柄があれば、教員側で受け留め、アドバイスや励ましを欠かさないようにした。事前に2年生のリーダーを集めて分団単位での行動や準備、分団の進め方の説明をして修養会に臨ませるような指導もした。こうして、分団リーダーの2年生は事前準備の段階から役割が与えられる。修養会期間中は分団での司会進行だけでなく、集合時の点呼から報告書作成・発表まですべて取り仕切る。以下に、リーダーがどのような思いで取り組んだのかを、事後作文から抜粋して記す。(註2)

- ・私は最初、分団リーダーをするのが嫌だった。実際にまとめたり司会をしたりと、とても大変で、つらかったが、他の人が協力してくれ、支えてくれた。今ではリーダーをやってよかったと思える。ちょっとした困難を乗り越えることができたのではないかと思う。
- ・3日間のプログラムを終え、今の私の思いは達成感でいっぱいだ。修養会の準備期間に入ってから、分団リーダーという責任は私にはできないととても悩み、人の先頭に立つことにプレッシャー、苦痛を感じていた。そして修養会のテーマを知って「使命」って何だろうとまた悩み、憂鬱になっていた。(中略)私には分団リーダーとなることを使命として与えられたように思う。それはきっかけとして与えられ、どう受け容れるかによって大きく左右されるのではないか。毎日不安やプレッシャーに耐えてきたこと、責任の重さに悩んだ日々は私にとって困難な方を選んだことになる。その困難を乗り越え、今やってきてよかったと思う。

上記の例のように、必ずしも指導力を持つ学生がリーダーになるとは限らないのであるが、2年生という自覚から友人同士協力して3日間にわたる話し合いを進行し、意見をまとめていく。この経験を通して、指導力が育成され、各人の成長につながっていくのである。

この時点で実習をすべて終えている2年生は、ディスカッション時の気分転換として1年生に実習の体験や保育実技、手遊びや教材の紹介、コツなどを伝えていく。分団活動の中心はディス

カッションにあるが、2年生という自覚から率先して1年生を引っ張ろう、発言できる雰囲気作りをしようという意気込みが見られる。

- ・私は分団サブリーダーとしてリーダーと共にみんなをまとめる役割をした。またソングの時間や礼拝のキーボードを担当したことで、とても充実した時間を過ごすことができたと思う。去年の修養会での先輩を思い出すと、自分たちが1年生を引っ張り修養会を成功させることができるのかとても不安だった。しかし、講演を聞く時や礼拝の態度など、どれを見ても1年前の自分からは明らかに成長している。1年生を注意できるまでになっていた。
- ・去年の修養会とは、全く異なるものとなった。まず修養会委員として早くから準備をし、この会を運営するものとして参加したこと、もう一つは2年生となり、1年生を引っ張ってこの修養会に参加したということが理由だと思う。去年は初めての参加だったこともあり、なぜこんなことをしなければならないのかという気持ちで参加し、2年生についていくばかりだった。しかし今回は委員としても、人より少し前を歩かなければならず、私にとっては貴重な体験だった。修養会委員になってよかったと思う。

一方、1年生は初めて体験する修養会を2年生にリードされて過ごすのだが、その経験の中で、2年生の言動を見て様々な点で感ずることがあり、作文にもその点が多く取り上げられる。

- ・話し合いに疲れた頃、先輩が休憩しようといっているいろんなことをした。普通に遊んでいるのに保育にちょっと関わっているのが不思議だった。先輩はすごい、かっこいい、尊敬する人だ。1年の差ってこんなに大きいのだと思った。
- ・同じ目標を持った友達や先輩と一つのことを課題とし、話し合っていくうちに、自分の中で少しずつだが何かが変わり始めてきた。先輩の書いた作文を見て驚き圧倒された。修養会への意気込みがまずそこで感じられた。先輩たちの話を聞いているうち私も将来の自分を考え、今までの自分を振り返っていた。この先いつもの生活に戻ってもこの気持ちは忘れず、来年は2年生のようにしっかりした自分になりたい。
- ・2年生の先輩から実習などの話や自分の考えを聞いたが、口先だけでない強さを感じた。来年は自分たちの番だ。1年生に確かなものを伝えられるようにこの3日間深く考えたことを忘れないで、努力していきたい。
- ・修養会によって神の存在を知ること、考えること、聖書の意味を分かろうとすることができ、少し北陸学院の学生らしくなれたと思う。あつという間で楽しい修養会だった。こんなすばらしい修養会を経験したからこそ、来年は私たちもすばらしい修養会にしなければならないと思うし、55年の長い歴史を大切にしたい。

このように2年生から1年生への、修養会を含めた保育学科での学びの継承、言い換えれば学科独自の文化のバトンタッチが行われていると言ってよい。1年生は、来年自分ができるだろうかと書きながら次年度の自分をイメージしている。これは2年間に亘る行事であり、先輩と後輩のつながりがある合同の行事だからこそ言えることである。

(2) 学生企画の導入

二日目の午後は、多種のレクリエーションを通して親睦を深める時である。学生の要望で3年

前から始まった「ミニ運動会」は、250人の学生が一斉に室内で行う約1時間の分団対抗ゲームが主である。修養会委員の学生が内容を検討し、進行表作成や物品の準備などをして修養会に臨む。「学生企画」時は分団を解体し、事前に登録した幾種類かの企画に個人単位で参加する。各企画の責任者は担当の修養会委員だけでなく、クラブ部員など他の学生に任せる内容もある。予め登録人数の把握をするが、初めて顔を合わせる1・2年生に内容を説明し、ゲームなどの指導をしていくことも、保育者としての資質育成につながっていく。

- ・2年生となり、ゲームのリーダーをしたが、人をひっぱっていくことの難しさなど、保育とはまた違う難しさを実感した。やり終えた今は、やってよかったと思っている。この修養会での私の使命のひとつだと感じている。
- ・礼拝の奏楽やゲームの進行という役割を与えられ、自分の力不足を感じながらも、このような役割がなかったら気づかなかった自分の一面を見ることができた。修養会での私の使命が一応達成できたように思う。

4 作文の導入と修養会委員の役割

(1) 作文の導入と効果

従来、オリエンテーションは1回だけで、その中で修養会の目的とテーマを示してきたが、多くの学生は受身で参加しがちであった。修養会で講演を聞き、分団協議の場でいきなり人生について考えようとしても、なかなか自分のものとはなり得ない。より主体的に参加するためには、テーマが各自のものになっていなければならない。そこで、2004年度からは、事前準備として学生に作文を課した。主題講演の聖書箇所を示した上でテーマについて考えることにより、漠然とではあるが修養会で何について話し合うのかをつかむことになる。作文を課す際、主題講演を行う講師への質問を含めてよいこと、いくつかを代表例として講師に送ることを知らせている。講演担当の講師が、学生の関心事や意識・理解度を予め把握できるように、20名程度の作文を抜粋して送って講演の参考にしていただくほか、助言参加者の牧師の方々にも、担当する分団メンバーの作文を予め読んでいただくようにした。このような段階を経ることで、学生の実態に即した講演や助言が行われ、学生も聴く姿勢を持って参加するようになった。

修養会中、分団での話し合いの時に手元に作文を置き、読んでいく分団もある。修養会の最後にもう一度テーマを振り返って作文を書く時間をとる。この時に最初の作文を読み返して、自分の考えの変化や深まりを確認する学生も多い。以上の流れにより、学生たちは修養会前から問題意識を持ち、講演も積極的な姿勢で聞くようになってきている。

2回の作文の導入を通して、学生たちの学びと意識の変化を見ることができる。

- ・修養会前の作文と比較して、明らかに今の方が成長したと思う。与えられた使命を考えるのではなく、使命そのものを何かと深く考えることができたことが、私の成長の糧になったのだと感じた。人の話にしっかりと耳を傾けることがこんなにも大事だったのだということを改めて感じた。
- ・初めに書いた「使命」についての作文を修養会が終わってから読み返してみると、使命に対する自分の考えが少し変わったように思う。

- ・修養会が始まる前に書いた作文を、始まってから読み直すと、間違っていないと思うけれど、とても薄っぺらい文章だと感じる。この修養会で分団のメンバーと話し合っただけで考えが変わった。
- ・当日になるまで、課題レポートで「使命」についていろいろと考えていたが、「これだ」という使命を考えることができずに修養会に参加することになった。講演やディスカッションなどで「使命」についてよく考えよく知ることができた。修養会を終え、とても成長することができたように思う。

事前作文や事後作文の中には、中高時代の自分の生き方や出来事を語り、自己を省察している記述が見られるものがある。作文はアドバイザー教員や主題講演講師、助言者が読むことを伝えるのであるので、自分の過去に触れたがらない学生もいるはずである。その中で、あえて問題を抱えていた過去や現在の自分をさらけ出し、自分と向き合おうとする姿勢が見られる。修養会ならではの問題意識がそのようにさせるのではないだろうか。また、この作文をきっかけに、悩みや問題を抱えている学生との面談も可能となり、原因は何か分からないが気にかかっていた学生に対して、前向きな学生指導につなげていくこともできる。

(2) 修養会委員の役割

修養会委員は半年前から活動を開始する。前年度の体験を基に何ができるのか、何をしたいのか、話し合い、イメージを作りながら準備を進めていく。係の内容ごとに担当教員が付き、アドバイザーの役割をしていく。修養会委員のまとまりや意欲が欠けると、準備だけでなく、当日の進行や他の学生の参加意識にも大きな影響を及ぼす。したがって修養会委員がどれだけやる気を持って取り組めるかが、学生主体の修養会となるかどうかの鍵となる。委員は1、2年生とも10名程度で中心は2年生であり、さらに修養会リーダーが全体の中心となる。そのため、核となる学生に予め修養会委員への立候補を依頼することもある。立候補者が相次ぎ、定員をオーバーした年もあるが、この意欲を教員側も評価し、自主性・主体性を尊重して準備を進めることとした。

修養会委員は全員が同一グループのメンバーではない。また全体の前に立って活動することが苦にならないタイプもいれば、裏方としてこつこつ働く方が好きな学生もいる。その組み合わせをどう生かすかは、メンバー同士の話し合いによる役割分担と教員の指導による。

修養会期間中の修養会委員は、他の学生と同時に動くのではなく、常に一步先を動くようにしている。初日は先に会場に到着し、セッティングを終えて学生たちの到着を待ち、指示・誘導する。こうすることで学生主体の行事であるという意識で修養会が開始される。さらに、委員として行動しているということを自他共に認識できるように、委員は揃いのトレーナーを着用する。修養会中は、時間調整などの相談を教員が受けるが、進行は基本的に学生が前面に出て行く。

- ・修養会委員として、昨年に引き続き学生企画を担当した。昨年の経験から、今年も良い修養会をしたいと思い、委員として頑張ってきた。内容を考えたり、どうすればよいか悩む時もあったが、今振り返ってみるとその悩みがあったからこそ、よいものになったと思う。考えること、振り返ることで「使命」に気づき、見つけることができると思った。
- ・今回委員に立候補し、運動会の係を受け持った。準備をし、先生に相談しながら行ってきた

が、いざ司会をしてみると思い通りにいかず、大変な部分、失敗もあった。しかしそこで、仲間の存在の大きさ、支えてくださる先生の存在の大切さに改めて気づくことができた。何にでも全力で頑張る保育学科の良い面も、前から見て感じた。どうしたらみんなに楽しんでもらえるかと心から考えている自分もいた。これこそが損得を超えることだ。この修養会で話し合いや講演、修養会委員としての役目から使命について深く心に刻むことができた。

- ・(事前作文) 使命ということを細かい視点で見たとき、修養会委員として修養会を成功させることではないかと思う。私だけでなく、修養会委員のみんなが共通の使命であると思う。終わったとき使命を果たせたという爽快な気持ちで満たされていたらいいなと思う。

(事後作文) とても有意義な3日間だったと思う。修養会委員として役割を果たすことや修養会を成功させることがやはり今の私の使命だったと気付くことができた。身近な使命の一つである修養会を終えて、とても気持ちがいい。修養会が最後だと思うと悲しい。

学生たちは、委員として活躍する仲間を評価し、自然と協力するようになっていく。作文にも、委員の働き振りに触れて感謝の気持ちを記しているものも多い。

- ・初めての修養会で不安や緊張もあったけれど、それ以上に喜びや楽しさを体験することができた。先輩たちのおかげだと思う。修養会委員の人達や分団の先輩たちが忙しく働いている姿を見て尊敬した。とても感動できる修養会だった。
- ・修養会委員の係の人達が一つの行事を成功させるために頑張っている姿を見ることができた。頑張っている姿は輝いていて、こちらまで頑張ろうという気持ちになる。頑張っている人には人を引きつけ、人の心を動かす強い力を持っているのだと改めて感じた。
- ・修養会委員長で友人の〇〇さんの働きには本当に頭が下がる。いろいろな人から頼りにされ、それを引き受けてやり遂げる姿勢が、人として立派だと思う。

5. 修養会での学びの位置づけ

西浦らの「保育者養成における特別活動プログラムの評価」では、①コミュニケーション能力の育成、②集団行動力の育成、③自己教育力の育成、④近隣の教育資源が持つ教育力の活用、の4点を挙げて評価している。^(註3) 修養会における事後作文の記述をこの尺度で分類すると、以下のような表現を抽出できる。

①コミュニケーション能力の育成

- ・ディスカッションを通して自分と他の人の価値観を知る
- ・普段交流のない人と交流でき、さまざまな人の価値観を見る
- ・人との交わり(命の交流)は人間にとって本当に大切なことだ

②集団行動力の育成

- ・日常生活の中で今までよく見えていなかったところまで他人のことを考えられる
- ・修養会委員は自分たちの時間を修養会を成功させるために使っているなので、協力して行動を早くしようと思った。団体行動のマナーとして10分前行動を心がけた。
- ・私達の分団は最高の仲間だ。ここまで団結を組み、1年と2年の間が近くなるとは思わなかった。

③自己教育力の育成

- ・今年をサポートする側として、どうしたらみんなが楽しめるかを考えた。
- ・牧師先生の話も自分なりに理解し、私はこの一年で成長したと感じた。
- ・今回で最後となる修養会で、自分の気持ちと向き合うことができた。就職の悩みや普段のストレスなどを友達や分団で話し合うことですっきりしたり自信がついたりした。
- ・昨年とは少し違う気持ちで迎えた気がする。リーダーというや不安もプレッシャーもあったが、たくさんの学びがあればいいなという期待の気持ちもあった。修養会を通して自分の価値観やありのままの自分であることを大切にしていきたいと思った反面、他者のことを思いやる気持ちや自分から心を開いていくことを心がけようと思った。

④近隣の教育資源が持つ教育力の活用——人的資源としての牧師の存在を欠かすことができない。助言者として語ることに、学生の聞き手、調整役、方向性を示す立場で学生主体を尊重した関わり方をお願いしている。

- ・私は一年で本当に考えが変わったと思った。このキリスト教のもとで勉強することは、とても奥が深く、自分を育てるのに最適だ。
- ・去年の修養会でもキリスト教についての学びを深めることで成長できたと感じたが、今年はさらに成長できた。
- ・今まで以上に讃美歌が好きになった。1、2年で歌う一体感、きれいで感動した。賛美礼拝でも気持ちを落ち着かせることができ、キリスト教が身近に感じられる。

事前・事後の作文を語彙面で比較してみると、1、2年生の差がはっきり出てくる。例えば「不安」という表現では、1年生は「行きたくない、面倒だ、何になるのか、キリスト教と保育者養成は関係ない、2年生と何を話せばよいのか」などを挙げており、参加に関して消極的・否定的な不安要素が多い。2年生は「リーダーの責任を果たせるか、1年生をまとめられるか」という参加を前提にした内容である。また、「楽しもう、みんなの考えを聞きたい、何か学べるのではないか、どうしたらみんなに楽しんでもらえるか」という、より積極的な記述が見られる。一方、「学びを深めた」という記述は2年生により多く見られる。さらに学んだ内容も「1年間の自分の成長、考えの変化、ディスカッションへの積極的参加、リーダーとしての自覚、企画者としての意識、キリスト教精神の理解、保育者として必要な他者理解」など、幅の広いものとなっている。

このように2年生の方が意欲的に参加して幅広い学びを得ているのは、2年目の参加ということ意識して行動しているからであろう。1年生に実習体験を語ったり保育技術(遊び・ゲーム)を伝えたりする意識の中には、保育者として就職するという視点で行動したり語っていることが多くある。理論・実習・実技だけでなく、先に挙げた西浦らの評価項目のコミュニケーション・集団行動・自己教育力に加え、企画力・リーダー性など、多くの学びを経験できる貴重な行事であると総括できるのではないだろうか。つまり、修養会への関わり方は単に「参加者」としてではなく、「企画者」「調整者」としても総合的な関わりや学びをしていると考えられる。

6. 2年間継続、2学年合同で実施することの意義

学年による意識の差が見られるのは、事前作文よりも事後作文「修養会を終えて」の記述内容

である。1年次の体験を持つ2年生の方がより積極的・意欲的に参加している分、充実度が高いと言えよう。作文を機に自己の生き方を見つめ、修養会を通して自己の在り方を再確認しているのである。1年生はまだ、「保育の道を選んだこと、保育という仕事は自分に与えられた使命だ」のように、生き方を保育に限定して捉えているものが多い。むしろ2年生の方が、中学、高校時代の進路選択や人間関係、当時の自分の立場などを振り返り、その中で自分の生き方をもう一度見つめ直すなど、考えの深まりや幅がある。(以下はすべて、2年生の作文からの抜粋である。)

- ・(事前作文) 私は最近生まれてこなければ良かったと思うことがある。自分は一体何を追求しながら生活すればよいのかを見失ったからだ。強い劣等感に襲われ、人の目ばかりを気にして。私が私であるためにはどうしたらよいのだろう。回りを気にせず、オンリーワンであればいいなんて、奇麗ごとにししか聞こえない。結局人間は勝者と敗者が生まれると思う。その敗者の位置に自分はある。就職が間近に迫り、とてもあせる。本当にこんな私が社会に出て働くことができるのか。自分に自信がなく、自分が嫌いだ。私なんていなくなっても世の中は何も変わらず動き続けているとさえ考えてしまう。しかし、今回の修養会のテーマを聞いてはっとした。私にも使命があるかもしれない。尊い命を持った自分。まず自分を好きになることから始めようと思った。

(事後作文) 初めて「あなたの使命とは」と聞かれた時、私は自分を愛し、自分を好きになることだと思った。私は小さなきっかけから修養会委員になった。初めは何をしていいのか、何のためになるのか、正直止めておけばよかったと思った。しかし、自分を愛するためにはこのままではいけない、自分から何かを起こさなければと思った。修養会委員として修養会を作り上げることが神が私に与えられた使命だと思った。神が「あなたは変われる。たくさんの可能性を持っている」と言っているように思えた。終わってみて思った、「今の自分が好きだ」と。やり遂げ、みんなに「運動会すごく良かった」と声をかけられ、自分もやればできると思った。

- ・1年間付き合ってきた友達との仲を深めつつ新たな発見があるだろう、また修養会のテーマを自分なりに考えてみよう、という意識を持って参加した。
- ・1年生の時に比べ、この会を楽しみにしていた自分に気づいた。友人と寝食を共にする以上に、みんなが何を考えているのか聞ける、話せるということが嬉しい。
- ・今年のテーマは去年よりずっと難しかった。修養会での使命として、賛美礼拝でのフルートアンサンブルがある。学校で練習していた時には感じなかった「責任感」「使命感」を修養会が始まってからひしひしと感じられるようになった。修養会に参加した者全員に何らかの使命があるとすれば、私にとっての一つはこの賛美礼拝だと感じながら演奏した。この時私にはなぜかよく分からないが、不思議な感覚があった。
- ・考えていくうちに、私は今までの自分と向き合うということを全然していなかったことを強く感じた。自分とはどんな人間か、見つめることが使命を見つけるために必要だと思った。自分に何が足りないかを考えてみた。強い意志と責任感だと思った。自分の発言したことを少し否定されたりすると、すぐに相手に合わせてしまい、自分の意志が変わるところがある。自分というものをしっかり持って、相手の意見を受け入れつつ自分の意見を伝えていくこと

を大切にしたい。

- ・使命について考える時、「生きる」という使命も間違っていないと気づいた。ただ一言で生きるというのではなく、他者と関わって生きるということに大きな意味があると思った。今他者との関わりこそ私の使命だと思う。自分を出して他者と理解し合うことが自分の成長に繋がると感じた。
- ・2度目となる修養会が終わった。学年が上がり修養会に対する気持ち、テーマについて考える姿勢など様々なところで変わってきた自分を感じている。修養会を通して自分を見つめ直すことができるよい機会となった。

7. 終わりに

保育士養成課程の改訂に伴って新設された「総合演習」とは別に、本学では「自己の発見」という独自科目を設定している。修養会は「自己の発見」の単位に組み込まれているが、内容的には、「総合演習」と重複する部分が多い。^(註4)「総合演習」の目標として掲げられた①保育に関する自発的・科目横断的な学習能力の習得、②保育に関する現代的課題についての現状分析・検討、③問題解決のための対応・判断方法などは、修養会の取り組みの中で様々な形で生かされ実践されていると言える。保育者に求められる人間性、社会性、自己教育力の育成、個性を尊重する教育、特色ある教育という点においても、主題講演に耳を傾け、ディスカッションや学生企画などでの他者との交わりを通して、自己の生き方をふり返り、保育者としてのあり方、生き方を模索していく姿勢を養うことに繋がっている。このような学びは成果として短期間には現れてこないが、楽しいだけの行事に終わることなく、不安や悩み、疑問、問題点を自ら考えながら解決していくという根本的な態度を養う絶好の機会と位置づけることができる。

現在修養会を実施している11月中旬から下旬という時期は、2年生にとっては就職活動の最中である。しかも、カリキュラム上のゆとりがあるわけではない中で2泊3日の修養会を行うことは、時間的にもきびしいものがある。しかし学生の育ちにとって2年間の学びを振り返り、一人の人間としての存在意義を確認することは、他の科目をもって代えがたい大きな学びのときである。事後の作文でも昨年以上の学びを得たとはっきり書く学生が2年生に多くいる。従来のレポートには見られなかった記述である。

学生や教員も、ともすれば保育実技重視の即戦力育成に傾きがちであるが、保育者として歩む前に、自己の存在や他者の命・存在について深く考える時が必要である。「修養会」を、学生の主体的活動を尊重した学びの場として位置づけることで、各科目で学んだことを各自が総合化し、子どもに還元していくことを主眼に置いた「総合学習」であり、その実践と反省を保育者となってからも生かすことができるものであると考える。時代とともに行事の中身が変わっても、個々の科目では学びきれない総合的な学びの場であるという修養会の精神を守りつつ、検討を重ね、学生が能動的に関われる修養会を企画していかなければならない。

付記：この原稿は、2005年5月21日に日本保育学会において、「行事を通して保育者としての総合的な育ちを考える」というタイトルで口頭発表（発表者：山森・中島）したものに、

資料・検討を加えて、加筆修正したものである。

参考資料

1. 他学での取り組み（アンケート調査から）

「キリスト教主義短期大学（保育者養成）における宿泊行事に関する調査」として、保育者養成課程を持つ短期大学のうち、「キリスト教学校教育同盟」加盟 15 校、「日本カトリック連合会」加盟 13 校、計 28 校を対象に、郵送によるアンケート（選択肢・一部自由記述）を実施した。相互の学校行事や教育課程に生かせるよう、養成校において宿泊を伴う行事がどのように行われているのかの実態や成果・問題点を知ることが目的である。実施時期は 2005 年 2 月末から 3 月末、回答を寄せた学校は 17 校（教育同盟 7 校・カトリック連合会 10 校）である。

アンケート実施に際しては、趣旨のほか、学校名は非公表で保育学会において結果・考察を発表する旨を記して依頼した。

以下の結果でわかるように、本学のように 2 泊 3 日で 2 学年合同で宗教的要素を含めた宿泊行事を行っている学校はそう多くはない。しかも宿泊行事の内容は導入教育の要素が主であり、本学のように「総括的な総合学習の場」として位置づけるものは少数である。

アンケート結果（集計結果から主なものをまとめた。） ※印は本学該当部分（数には含まない）

宿泊行事の実施	している	やめた	元来ない
	13 ※	4	1
宿泊日数	1泊2日	2泊3日	その他
	12	3 ※	
宿泊形態	1年生のみ	1・2年生	2年生のみ
	13	1 ※	1
宗教的行事	入っている	ない	
	10 ※	3	
学生の主体活動	ある	ややある	ない・その他
	10 ※	2	各1
実施上の問題点	ある	ない	その他
	6 ※	5	1

① 宿泊行事をやめた理由（複数回答可）

- ・学生数が多い 2 ・日程が取れない 2 ・費用がかかる 2
- ・教員の負担大 2 ・適当な施設がない 2
- ・欠席が多いから 0 ・その他 1

② 目的

- ・学生教員の交流 ・建学の精神を学ぶ ・保育者の自覚 ・これからの生き方

③ 実施時期

- ・4月上旬 3 ・4月中旬 1 ・4月下旬 2 ・5月上旬 0 ・5月中旬 4

・5月下旬 1 ・4～5月 1 ・12月中旬 1

④ 実施上の問題点

・2年生の関わり方 ・新入生行事の短縮 ・行事の前が実習 ・発表会が出し物

⑤ 実施しての成果

- ・教員学生の間関係を深める
- ・導入教育、入学後の不安解消、今後の展望
- ・テーマを意識して行動、考え、感じる機会
- ・建学の精神を学ぶ
- ・保育を志向する者の話し合いの場、一体感
- ・幼児と関わる際の工夫・必要事項を知る
- ・実習のノウハウの伝達
- ・体験を通して学ぶことへの理解
- ・施設見学、入所者に触れ、視野が広がる

⑥ 宗教教育との関連Q 22の回答を全文掲載してある。(個)とあるのは、回答者の意見である。

- ・愛と奉仕の心を育てることで、自然と子どもに対しても愛と慈しみを持って接することができる。と考える。
- ・宗教的教育をあまり狭い意味で捉えないようにしている。人間としての成熟、キリスト教的価値観(全人類は神から生まれ、神に愛された存在で、皆兄弟である。互いに愛し合って生きるなど)に基づいた生き方が身についてくればと願っている。(個)
- ・本学は平成16年より男女共学とした。それ以前は女子大として「誠実・純潔・奉仕」の精神で教育してきた。保育者を養成する上で、これらは重要な指針となり、人格形成上も重要な内容として捉えてきた。このことは今日の本学においても変化していない。(私見だが)保育者養成校として独自の教育目標となっている。
- ・保育や教育の営みは、根底に「人間をどう理解するか」との人間観に基づくものだと思う。本学ではカトリックの「人間理解」に基づく教育が微力ながら追求され、実践されている。もちろん子ども学専攻に入学してくる学生はいろいろな宗教(無神論も含む)を持っている。そのことは「人間の尊厳」の立場から尊重されるべきものであろう。その上で、本学では「キリスト教概論」などの教科を必修科目とし、創立記念日のミサへの参加などの学校行事を通して宗教教育を行っている。宗教的次元をも視野に入れて幅広い保育者を養成できるよう希望しながら日々の教育に励んでいる。(個)
- ・現在はチャペルを週1回、あとキリスト教理解に関する授業があり、キリスト教精神を基盤とした教育活動を行っている。キリスト教保育実践的方法に関する学科目は現在のところ未配置であるが、キリスト教保育の実際を附属幼稚園などで知ることができる。また近隣でキリスト教保育を行っている園長などを招いて、チャペル時にメッセージを聞いている。
- ・保育者養成の基本としているキリスト教教育について、その根本・基盤となっている聖書のお話をする時間があるため、この研修旅行は営みやすい。信者の学生は少数であるが、信者・未信者に関係なく、建学の精神に立ち、キリスト教教育はゆるがせにできないと

思っている。しかし現在はクリスチャン教員が少なくなり、苦戦している。

- ・キリスト教教育は、交わりの教育であり、人格と人格との深い出会いと交わりを追求する。そのような教育は、子どもと心の通い合う温かい人間関係を築き、愛と信頼を経験することは、神を愛し信頼する信仰心の土台ともなる。
- ・最も根本的なところで保育者の人間観や自然観に必要だと思う。具体的な宗教や宗派に限らず、人間が生きることを考えることは保育者養成に欠かせないと思うからだ。(個)
- ・キリスト教的な人間観、価値観をもって、乳幼児に関わり、保護者を支援することはよい保育者を育てるために大きな力となる。(個)
- ・ドン・ボスコの教育法に根ざして保育者養成を行っており、その中で宗教的教育が自然と行われるようになっている。
- ・(このオリエンテーション旅行そのもので、この設問には答えにくい。)朝拝を中心にして、祈る姿勢(生活)は大切にしたいと考えている。講座としては「キリスト教保育」「キリスト教教育」を設けている。キリスト教概論(必修)や礼拝出席(任意)において、保育の学びの基礎作りが為されることを期待している。設問の接点があるとすれば、やはり人間観、児童観を手がかりにして、何を大切にするか考え続ける姿勢こそが重要に思える。(個)全学的には、宗教部主催による夏のキャンプ(修養会)冬のキャンプ(修養会)各2泊3日があり、本学科の学生(主としてキリスト教関係入学者)も積極的に参加するように勧められている。人数としては一桁台の出席が現実。

⑦ その他(Q23)

- ・宿泊体験は重要、キリスト教的な雰囲気の中で宿泊を行うことは有益。

2. アンケート内容

キリスト教主義短期大学(保育者養成)における宿泊行事に関する調査(※回答スペースは省略した)

- Q 1. 貴校名 _____ 1学年 定員 _____名
- Q 2. ご回答者名 _____ (担当職務 _____)
- Q 3. 貴校では、2年間の在学中に宿泊を伴う学習プログラムを実施していますか。
- ① いる →Q6にお進み下さい。
- ② _____
- Q 4. (Q 3. で②③を回答された場合)現在宿泊プログラムを実施していないのはどのような理由からですか。(複数回答可)
- ① 学生数が多すぎるから ② 日程が取れないから ③ 欠席する学生が多いから
- ④ 費用がかかりすぎるから ⑤ 教員の負担が大きいためから
- ⑥ 適当な施設が無いから ⑦ その他()
- Q 5. (Q 3で②を回答された場合) 行事をやめたのはいつごろですか。
- Q 6. 実施しているプログラム名は何ですか。
- Q 7. そのプログラムの目的はどのようなことですか。

山森 泉・中島 賢介

Q 8. 実施時期はいつごろですか。(例：4月下旬の平日)

Q 9. 宿泊日数はどのくらいですか。

1泊2日 2泊3日 3泊4日 その他 ()

Q 10. 宿泊場所はどのようなところですか。

① キャンパス内の宿泊施設 ② キャンパス外の独自施設(場所)
③ 民間の研修施設 () ④ ホテル () ⑤ その他 ()

Q 11. 参加形態はどのようになっていますか。

① 1・2年生対象 (全員参加 ・1年生のみ全員 ・2年生のみ全員 希望者)
② 1年生のみ対象 (全員参加 希望者)
③ 2年生のみ対象 (全員参加 希望者)

Q 12. この行事は、貴学科独自の行事ですか。

① 他学科との合同(一斉)行事 ② 他学科も実施しているが、学科独自の時期・内容
③ 本学科のみで他学科は実施していない ④ その他 ()

Q 13. この行事のなかには宗教的要素が入っていますか。

① 入っている ② 入っていない ③ その他 ()

Q 14. (Q 13で①の回等の場合)どのような内容ですか。該当するすべてに○を付けてください。

祈祷(開会 食前 閉会) 礼拝(開会 閉会 賛美礼拝 夕礼拝 早天礼拝)

聖書研究(行っている 行っていない)

講演(牧師・神父による説教 牧師・神父以外のキリスト者による講演 その他)その他 ()

Q 15. プログラムの中に講演が含まれていますか。

① 含まれている ② 含まれていない ③ その他

Q 16. (Q 15で①と答えた場合)講師はどのような方に依頼していますか。

① 牧師(依頼する基準など) ② 内部講師(具体的には) ③ 外部講師(具体的には)

Q 17. 外部の講師を依頼する場合、どのようにして選んでいますか。

① 学長・学科長の判断 ② 宗教主事の推薦 ③ 学科内教員の推薦 ④ その他 ()

Q 18. プログラムの内容に学生の要望が反映されていますか。

① 前年の反省を踏まえて組み入れている ② プログラム段階で、学生の意見を聞いている
③ 教育課程なので、特に考慮していない ④ その他 ()

Q 19. プログラムの中に学生が主体となって取り組む活動がありますか。

① ある(具体的内容) ② どちらかといえばある(具体的内容) ③ ない ④ その他 ()

Q 20. 現在行っている行事やプログラムについて何か問題点がありますか。

① ない ある(具体的に) ③ その他 ()

Q 21. 現在行っている行事やプログラムは学生にとってどのような面で成果があると考えられますか。

Q 22. 宗教的教育と保育者養成との関連についてどのようにとらえていますか。

※ 学科統一の意見集約が難しい場合、回答者個人の見解でも結構です。(その旨お書き添え下さい)

Q 23. その他お気づきの点をご記入ください。

ご協力有難うございました。

註・引用・参考文献

註1：『保育短期大学十年史』1961、p 65 『北陸学院百年史』1985、pp82-83（第35回まで）。

第36回（1986）以降は保存されている「しおり」を参考にした。※印の年は「しおり」はないが、修養会関連資料の中に一覧表として記載されている。

註2：作文に関して個人が特定される内容を持つものは、学生本人の同意を得ている。

特に断りがない限り、事後作文を取り上げている。また、「ですます」調の文体を「である」調にしたほか、趣旨を損ねない範囲で表記を一部改めたり省略したりしてある。

註3：西浦和樹・中條和光・松原勝敏・坪井貴子「保育者養成における特別活動プログラムの評価」『高松大学紀要』40号 2004

西浦和樹・松原勝敏・中村多見「保育者養成における社会的スキル及び自己教育力の育成に関する教育心理学的研究」『宮城学院女子大学発達科学研究』2005

註4：「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の別紙3「教科目の授業内容」

（平成13年厚生労働省告示第198号）

今井章子・上野恭裕『新しい総合演習』保育出版社 2002